

一方、2号機からの高濃度汚染水は2万5000トンあって、そのセシウム137の濃度は300万Bq/立方cmで、ヨウ素131の濃度は0.13億Bq/立方cmと発表された。

この数値を基準としてセシウム137とヨウ素131の2核種の濃度を汚染水2万5000トンに含まれる濃度を換算すると2核種の放射性物質総量は単純計算であるが330京Bqと推定される。(京、兆の1万倍)

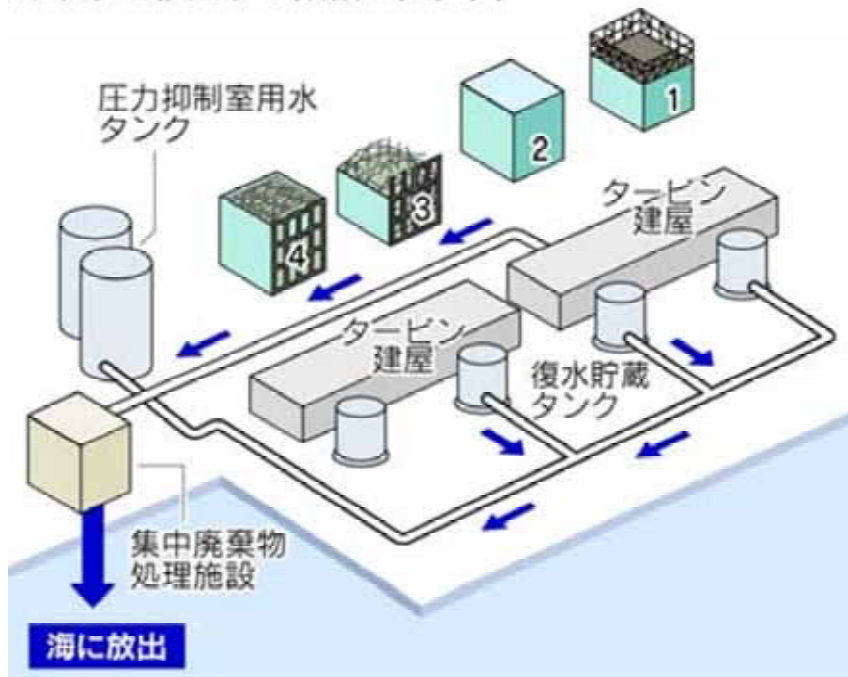
4月5日までに水素爆発その他で大気に放出された放射性物質の量は、ヨウ素とヨウ素131に換算したセシウム137の合計は、保安院は37京Bq、原子力委員会は63京Bqと換算したと4月12日公表した。

チェリノブイリ原発事故での放出量は520京Bqと公表されている。

この放出総量は、1瞬の爆発であったため大気に全て放出されてしまい、冷却水の循環はなかったため、汚染水問題は発生しなかった。

福島第一原発事故の今後の大問題は、冷温停止と共に高濃度汚染水の処理問題である。

汚染水を移送する設備の配置図



汚染水は既設の貯蔵タンクでは足りず、急遽貯蔵施設を建設したが、それでも足りず、その後も汚染水が急増し、再び海へあふれ出す寸前までになり、慌てた東電は6月に、アレバ社（フランス）の浄化装置（60億円）を急遽導入し、急場をしのごうとしたが、フランスから導入した期待の装置はうまく作動せず、さらに処理してからの高濃度廃液の浄化処理が難しいという。

その浄化の方式は、薬液を使って放射性物質を沈殿させ、分離する「凝縮沈殿」方式で、装置からは、ドロツとした廃液「スラッジ」がでる。

このスラッジの表面の放射線量は毎時1Svを超えるとみられており、人は近づけず、移動も不可能、保管も厳重な遮蔽が必要で、装置のある建屋の貯水槽には内には約580立